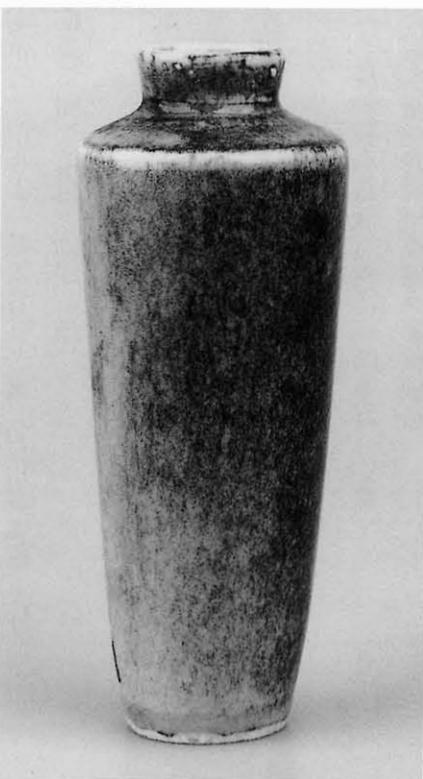


# 初代伊東陶山と西洋陶磁

—エミール・ミュラー社製辰砂釉花瓶—

尾野善裕



挿図1 エミール・ミュラー社製  
辰砂釉花瓶



挿図2 エミール・ミュラー社製  
辰砂釉花瓶(底裏)

明治時代に、前身である帝国京都博物館や京都帝室博物館の所蔵品となり、現在も京都国立博物館に現存している西洋陶磁（一部ガラス作品を含む）三十三件のうち、三十一件の来歴については、既に本誌第三十一号<sup>(1)</sup>や特別展覧会を通していささか詳しく述べて来たところである。いま、ここで取り上げようとするエミール・ミュラー社製の辰砂釉花瓶は、残る二件のうちの一件で、高さ僅かに一五・〇cmの小品に過ぎない（挿図1・2）。しかし、明治三十四年に京都帝室博物館の所蔵となつた際の関係文書が残つており、明治時代の京都窯業界の動向を考える上で極めて示唆に富む資料であると考えられるので、今後の研究の一助とすべく、特に紹介することとした。

まず、当該資料の形質について記しておこう。胴部は、円筒形に近い非常に縱長の逆円錐台形で、最大径は六・一cm。頸部は、直径三・三cm、高さ一・二cmの略円筒形を呈し、外側面からは高台の存在がよく判らないが、底裏の中央が直徑三・〇cm、深さ〇・八cmほど抉り込まれている。底径は、三・六cm。

釉薬は、底裏を除いて全面（内面を含む）に施されており、辰砂

釉に特徴的な紅色が、内面のほぼ全面と外面の半身に発色している。外面の残る半身の釉薬は、紅色の斑点が疎らに認められるものの、基本的にはやや緑色がかつた灰釉風の透明釉となつており、全体として中国清時代の桃花紅に類似した色調を呈している。

わずかに透明感のある白色の胎土は充分に磁器化しており、釉薬の貫入から推測されるロクロ回転は時計回り（右回転）であるが、内外面とも釉薬が厚く施されているため、ロクロ目からは回転方向を確認できない。底裏の露胎部分には、焼成後に記されたものらしく、現在では若干かすれていますが、「EMILE MULLER IVRY PORT」という黒色の手書き銘が認められる。この銘文から、二十世紀初頭にアール・ヌーヴォー様式の陶磁器を製作したことで知られるフランスのエミール・ミュラー社の製品であることが判り、独特の清朝陶磁風の釉調は、中国陶磁志向が強いとされる十九世紀末フランス陶磁<sup>(3)</sup>の特徴をよく示している。

ところで、この花瓶については、現在の列品台帳に「明治三十四年十一月六日 東京市松本清蔵寄附／大正十三年九月二十八日 東京帝室博物館引継」（／は改行を示す）と記されており、寄贈年月日は明らかであるが、一見明瞭なこの記述の解釈が実はなかなかに難しい。なぜなら、「東京帝室博物館引継」という文言が、東京帝室博物館からの引継とも、東京帝室博物館への引継とも読み取りうるからである。

もともと大正十三年（一九二四）には、二月に博物館の敷地・建物が京都市へ下賜され、恩賜京都博物館が発足し、列品の引継に半年近くを要したというから<sup>(4)</sup>、九月二十八日という日付を考慮するならば、東京帝室博物館から恩賜京都博物館への引継である蓋然性は高い。ただし、そのように考える場合、そもそもこの花瓶は京都ではなく東京の帝室博物館へ寄贈されたものではないのか、という疑いが生じてくる。

しかし、文豪としても知られる森林太郎（鷗外）が帝室博物館総

長を務めていた時期に、宮内庁図書寮が整理した帝国京都博物館時代以来の公文書綴り、「列品録」が京都国立博物館に今も残されており、この問題を考える上で手がかりとなる。この花瓶の寄贈に関する書類は、「列品録 四 取得ノ部」に収められており、関係部分の文書を綴りの順に示すと、次のとおりである。

文書①（挿図3）

一六八号

明治三十四年十一月六日 雇 石田誠太郎（印）

館長（印） 書記（印）（印）

技手（印）（印）

東京市松本清蔵代伊東陶山ヨリ辰砂釉小花  
瓶壺箇本館へ寄附願出候ニ付右受領之上  
左案領收證御交附相成可然哉相伺候也

記

一 辰砂釉小花瓶 西洋窯所不詳 壺箇  
右本館へ寄附相成辱ク領收候也

月日 館長名

東京市京橋区木挽町拾八番地 平民  
松本清蔵殿

文書②（挿図4）  
物品寄付願

一 辰砂釉小花瓶 西洋窯所未詳 壺箇  
右貴館へ寄付致度此段相願候也

松本清蔵代

京都市下京區石段下

明治三十四年十一月六日 伊東陶山

京都帝室博物館長山高信離殿

同年十一月廿日納

一 西藏喇嘛黃教法冠

一 西藏喇嘛教儀式法冠

一 西藏人寫真

計六点

壹個  
貳枚

文書③（挿図5）

卅四年十一月二日 佐久間信英（印）

館長（印） 書記（印）

技手（印）（印）（印）（印）

第四三六號 十一月七日發ス

本館へ獻納品之儀ニ付總長へ御上申按

東京市京橋区木挽町拾八番地平民松本清蔵外三名

ヨリ本館へ物品獻納出願許可ヲ得テ既ニ現品領取済之分

左ノ書式ニ依リ總長へ御上申可相成致此段相伺候也

獻納品之義ニ付上申

東京市京橋区木挽町拾八番地 平民

松本清蔵代理

京都市下京区祇園町南側 平民

明治三十四年十一月六日納 伊東陶山

一 辰砂釉小花瓶 西洋窯所未詳 壱個

計一点

京都市下京区東中筋魚ノ棚上ル 平民

同月十一月六日納

寺本婉雅

一 古瓦 清國金陵（南京）ニテ得ル所ノモノ 弐個

これら三通の文書から判ることを要約すると、次のようになる。  
まず、明治三十四年十一月六日に寄贈者の代理人から京都帝室博物館へ「物品寄付願」（文書②）が提出され、これを受けて同日付で受領及び受領証発送についての起案（文書①）がなされた。この起案文書には、館長印座に押印があることから、當時京都帝室博物館であつた山高信離によつて承認・決裁されていることが確認でき、約一ヶ月後の十二月二日には別件の他二名からの寄贈品受け入れと共に、東京の帝室博物館総長宛に上申・報告された（文書③）。

文書①・②が、

綴りの上で時間経過と逆に配置されているのは、文書

①が作成された際に、文書②を関連

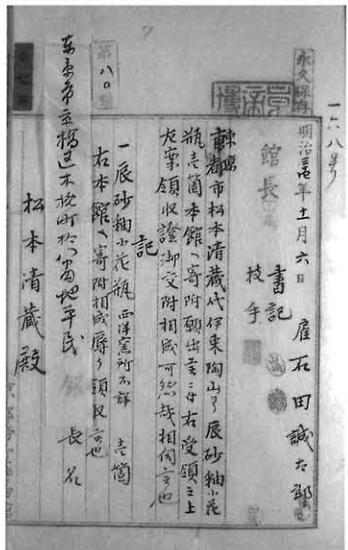
資料として書類の末尾に添付すると

いう公文書作成の基本に則っている

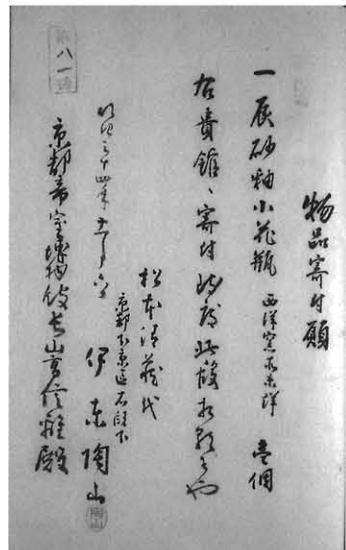
からであり、特に不審な点はない。

また、文書①・②で寄贈行為を「寄附」あるいは「寄付」と呼称しているのに対し、文書③で「献納」としているのは、当時の博物館が帝室という皇室に属する位置付けだつたために、寄贈行為自体が皇室への寄附、すなわち「献納」と見なされたことを示している。

さて、『列品録』の文書については、おおよそ以上のようにまとめることができるが、ここでは寄贈者・松本清蔵の代理人として文書①・②にその名がみえる、伊東陶山に注目したい。なぜなら、記載された住所と書類作成年月日から考へて、この人物は後（大正八年）に帝室技芸員に任命された近代京焼の陶工・初代伊東陶山その人に違いないからである。



挿図3 文書①



挿図4 文書②

これまで、各種

の展覧会や図録などで紹介されてきた初代陶山の作品

群を見ると、一部に日本で茶陶として評価されてきた

外国陶磁の影響も認められるもの

の、基本的には日本

の古陶磁を意識した作例が圧倒的に多くを占めている

よう見受けられる。こうした初代陶山の作陶上の志向性は、彼自身

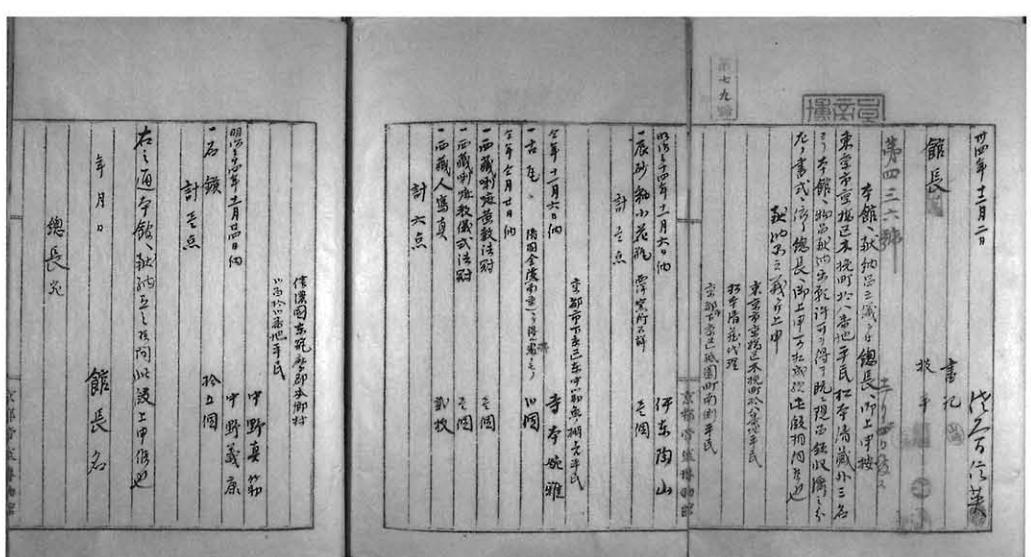
が参考とするため

に蒐集し、他の陶

工にとつての学習教材ともすべく、

大正八年（一九一九）に京都帝室博物館と奈良帝室博物館に献納（寄贈）した古陶磁からも、窺い知ることができる。

試みに、両館の後身たる京都・奈良の国立博物館に現存する全十六点の古陶磁の産地一覧を示すと、表1のとおりである。産地（国）



挿図5 文書③

を確定し難いもの数点を含むが、京焼を中心に九割以上を日本各地の陶磁器が占めており、確実な外国陶磁は僅か二点しか確認できない。しかも、二点のうち一点はいわゆる南蛮芋頭水指であり、もう一点も茶器として珍重された中国建窯の黒釉碗、すなわち建盏である。つまり初代陶山の視線は、明らかに日本文化の伝統に回帰する方向を向いており、蒐集品の中に西洋陶磁は一点たりとも含まれていない。それにもかかわらず、初代陶山が寄贈（献納）仲介の労をとっているという事実は、彼がエミール・ミュラー社の花瓶を京都帝室博物館に寄贈するにたる（あるいは寄贈すべき）ものと考えていただことと共に、同時代の西洋窯業界の動向に少なからず注意を払っていたことを示すものである。<sup>(7)</sup>

产地(国)	产地	作者
1 日本	京都	
2 日本	京都	
3 日本	京都	
4 日本	京都	真葛
5 日本	京都	岩倉山
6 日本	京都	錦光山
7 日本	京都	錦光山
8 日本	京都	初代清水六兵衛
9 日本	京都	初代清水六兵衛
10 日本	京都	四代清水六兵衛
11 日本	京都	清水六兵衛
12 日本	京都	青木木米
13 日本	京都	仁阿弥道八
14 日本	京都	仁阿弥道八
15 日本	京都	仁阿弥道八
16 日本	京都	仁阿弥道八
17 日本	京都	仁阿弥道八
18 日本	京都	仁阿弥道八
19 日本	京都	三代高橋道八
20 日本	京都	三代高橋道八
21 日本	京都	高橋道八
22 日本	京都	眞清水藏六
23 日本	京都	水越與三兵衛
24 日本	京都	永樂保全
25 日本	京都	永樂善五郎
26 日本	京都	仁清（模）
27 日本	京都	仁清（模）
28 日本	九谷	永樂善五郎
29 日本	赤膚山	木白
30 日本	赤膚山	木白
31 日本	背鹿山	井上松兵衛
32 日本	虫明	初代清風與兵衛
33 日本	出雲樂山	倉橋權兵衛
34 日本	高取	
35 日本	因久山	
36 日本	志戸呂	
37 日本	尾戸	
38 日本	源内	
39 日本	出雲	
40 日本	萩	
41 日本	朝日	
42 日本	元賛	
43 日本	理平	
44 日本	珉平	
45 日本	湊	
46 日本	志賀	
47 日本	伊賀	
48 日本	柳原	
49 日本	相馬	
50 日本	瀬戸	瀬戸助
51 日本	薩摩	
52 日本	肥後	
53 日本	八代	
54 日本	大樋	
55 日本	隅田川	
56 日本	対馬	
57 日本	信濃	
58 日本	備前	
59 日本	古曾部	
60 日本	京都か	
61 日本		
62 日本		
63 日本か		
64 日本か		高麗青磁写
65 中国か	(南蛮)	
66 中国	建窯	

表1 大正八年初代伊東陶山寄贈（献納）品产地一覧

陶磁が、日本の窯業関係者に強い衝撃を与えたことは、既に多くの論者によつて繰り返し論じられており、エミール・ミュラー社も注目を集めた製陶会社の一つであつたらしい。明治三十三年（一九〇〇）十二月発行の『大日本窯業協会雑誌』第九集第百号掲載の「巴黎通信」には、同社のことと思われるフランスの製陶会社「ミエレル會社<sup>(8)</sup>」の名が挙げられており、この博覧会で大賞を獲得したことが記されている。また、創立直後の明治三十五年（一九〇二）年に、京都高等工芸学校が図案標本として七点ものエミール・ミュラー社製陶磁器を購入しているという事実も、この推測を裏付ける。

どうやら、エミール・ミュラー社製辰砂釉花瓶寄贈（献納）の背景には、最新のヨーロッパあるいは西洋陶磁の流行を、いち早く日本へ伝えようという仲介者・初代伊東陶山の意図を読み取ることができそうである。<sup>(11)</sup>

蛇足ながら加えておくと、この花瓶が寄贈（献納）された時の京都帝室博物館の館長は、前述のように山高信離であつた。明治三十三年に帝国博物館が帝室博物館へと移行し、総長・九鬼隆一や

美術部長・岡倉覚三（天心）らの下で東京帝室博物館が美術重視路線へ転換していく時期に、依然として殖産興業のための見本品収集にも少なからず力を注いでいたのが山高である。<sup>(12)</sup> あるいは、所蔵者が東京在住であるにもかかわらず、この花瓶を東京ではなく京都の

二年）によると、これらは同年の皇太子成年を祝賀記念して献納されたものであるという。なお、同書では、京都・奈良の帝室博物館に献納（寄贈）された古陶磁の総数を約八десят点とするが、初代陶山の自作一点を除くと、実際には京都三十七点、奈良二十九点の合計六十六点である。

帝室博物館へ寄贈していることも、そうした博物館運営に対する九鬼と山高の姿勢の違いが関係しているのかもしれない。

僅か一点の工業見本のような花瓶であるか、その寄贈（南納）の背景を探つてゆくと、輸出産業としての窯業の興業を図ろうとする明治時代人の意氣込みが、垣間見えてくるかのようである。

小文執筆の過程で、清水愛子氏（京都工芸織維大学）・今井祐子氏（福井大学）からご教示を頂戴した。また、奈良国立博物館の内藤榮氏からは、同館所蔵の初代伊東陶山寄贈（献納）品の調査に際して、格別のご高配を賜った。文末ではあるが、記して深謝の意を表わしたい。

註

- 尾野善裕「帝国京都博物館の西洋陶磁収集」『学叢』第三十一号 京都国立博物館 二〇〇九年

京都国立博物館編『修好通商条約締結一五〇年 憧れのヨーロッパ陶磁—マイセン・セーヴル・ミントンとの出会い』 読売新聞大阪本社 二〇〇八年

荒川正明「陶芸における世紀末様式—十九世紀末の西洋と日本の美術陶磁の交流—」『出光美術館研究紀要』第一号 一九九五年

若杉準司「恩賜京都博物館の時代」『京都国立博物館百年史』 京都国立博物館 一九九七年

例えば、愛知県陶磁資料館編『明治の人間国宝—帝室技芸員の技と美術清風與平・宮山香山から板谷波山まで』（愛知県陶磁資料館 二〇一〇年）などを参照。

關如來「初代伊東陶山小傳」（『陶山餘香』（二世）伊東陶山 一九三六）

註6文献によると、初代陶山は明治十年代の西洋向け輸出陶磁器生産者が、全体として粗製濫造に陥っていることを強く憂い、栗田焼の改良を志したと伝えられている。したがって、陶磁器市場として西洋は早くから意識されていた筈である。

本稿では創業者であるEMILE MULLERがアルザス地方の出身者であることに鑑み、ドイツ式に「エミール・ミュラー」と表記したが、フランス式に読めば「エミール・ミュレル」である。

エミール・ミュラー社は、一九〇〇年のパリ万国博覧会において、陶磁器部門の「瓦・煉瓦・建築陶磁器等」の分野でグラン・プリ（大賞）を受賞している。

清水愛子「浅井忠によるフランス陶磁選定の経緯」『浅井忠が選んだフランス陶磁 明治35年購入の図案科標本より』 京都工芸繊維大学美術工芸資料館 二〇一〇年

ただし、産地について物品寄附願（文書①）には「西洋窯所未詳」と記されているので、初代陶山自身はこの花瓶が西洋のものであることは知っていても、フランスのエミール・ミュラー社製であるという認識は持つていなかつたらしい。